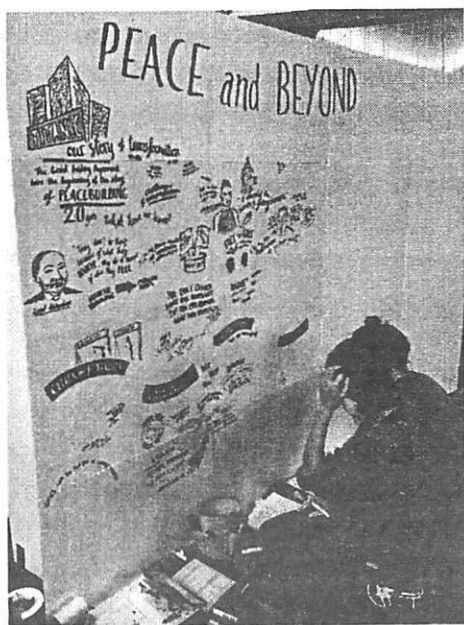


北アイルランド和平から20年— New Ireland を模索する女性たちのいくつものトランスナショナルリズム

分 田 順 子

和平合意から20年

この春、5年ぶりでベルファストを訪れる機会に恵まれました。鳴き交わすロビンの声は、厳しかった冬を耐えた小さなものたちの歓喜の歌に聞こえました。再会を楽しみにしていた植物園のスイセン、懐かしいコブシやハリエンシダ…、一斉に咲きだした花々に彩られた街は、30年余りにおよんだ紛争の影を感じさせない、穏やかな表情をたたえていました。勿論それは、この愛すべき街に踏みとどまり、紛争が引き裂いた社会を、自分たちの手で建て直そうとする人々がいたからこそこの今で、私は、彼らの唱える People's Peace Process を見守りたい一心で、北アイルランドがまだ紛争の最中にあった1991年から、ベルファストに通いつづけてきたのです。



しかし母の在宅介護を担いながら、大学での授業や入試の合間をぬって海外のフィールドに赴くのはなかなか難しく、実を言えば、特にこの5年間は、研究者としてのアイデンティティに危機を感じつづけた歳月でした。それでも今春、意を決して出張に踏み切ったのは、今年が1998年4月に結ばれた和平合意（ベルファスト合意、以下BA）から20年の節目の年にあたり、それを記念して開催された国際会議、Peace and Beyond (British Council 主催 2018/4/10~12 @Titanic Quarter) に参加するためでした。会議は、その名称が示すとおり、北アイルランドにおける平和創出の原点であるBAに立ち返り、そこからの歩みを振り返るとともに、未解決の課題を見えるというテーマを掲げたものでした。「BAから20年」が、私のベルファストでの学外研究（2001年から一年）を含む北アイルランドとの付き合いの年月に重なるという縁もあって、出張中は自ずと、この地で何が変化し、何が変わらないままなのかを見定める目線になっていました。

フィールドに出れば誰でも、図書館の保有するコレクションなどに日参し、あらかじめ目星をつけていた資料を、限られた時間の中で効率よく収集しようとします。しかし、自分の関心のアンテナを高く掲げてさえいれば、資料は向うから舞い込んでくるというのを、今回もまた経験しました。ベルファスト到着の翌朝、ホテルの宿泊客に無料で配布される朝刊（Belfast Telegraph, 2018/4/11）に目をやると、一面に、「BAから20年」関連の記事が出ています。地元のクイーンズ大学が主催した20周年記念イベントに、当時の和平交渉当事者が招かれ、

その立役者だったクリントン元大統領やブレア元首相らが、BA の意義を再確認するスピーチをしたという内容でした。ただ私にはお歴々の弁や動静はアピールせず、とぼしてページを繰

っていると、23 ページに縦横 10 × 20 センチの大見出しで “I want to build a united Ireland which can be a home to Arlene Foster” とあるのが目に留まりました。

*** Mary L. McDonald の United but New Ireland 論 ***

その記事は、BA20 周年に寄せてシンフェイン党 (Sinn Féin) 党首の Mary Lou McDonald (1969 年生、2018 年 2 月から現職) が寄稿したもので、見出しの中の Arlene Foster とは、民主統一党 (DUP) の党首 (1970 年生、2015 年 12 月から現職) を指しています。両者とも女性ですが、特筆すべきは、二人のまだ 40 代の女性が、この間にさらに分極化を遂げた北アイルランド政治の両極で、その「雄」とみなされてきた政党を率いているという現実です。McDonald はこの記事でも、自分はいくまでもアイランドの南北統一 (=北アイルランドのイギリス支配からの解放) を目指すリパブリカンだと繰り返しています。対する Foster も、北アイルランドはイギリスの一地域でありつづける (=北アイルランドのイギリス残留) と主張してきたユニオニスト強硬派の一人で、その気概を前面にだした言動で早くから注目を集めてきました。女性が、そうした民族主義政党の長に就く例は、世界を見渡しても珍しくはありません。しかし、彼女たちが、家父長主義的という点では一致してきた両党の党首に就任したという事実は、この地の政治とジェンダーの関係に起きた地殻変動を示唆しています。女性たちが和平交渉への参画を期して結成した北アイルランド女性連合 (NIWC、1996 年結成、2006 年解散) に、女性嫌悪むきだしの男性政治家 (とくに DUP の面々) が旧態然たる野次一「女は台所に引っ込んでろ！」等々を浴びせかけていた 20 年前を思えば、今はまさに隔世の感があります。

さて McDonald の寄稿文の中味ですが、私が感銘をうけたのは、先の見出しにつながる次のくだりでした。少し長くなりますが、原文のまま引用します。“I am an Irish Republican, a United Irlander. The united Ireland I seek is not simply adding the north on to the south. It is about

a new and agreed Ireland. An Ireland in which you can comfortably be Irish or British or both or neither. The united Ireland I want to build has to be home for my family and for Arlene Foster and her family. We will not repeat the mistakes of the past. We cannot countenance the exclusion or discrimination of any section of our people in a new Ireland. The Good Friday Agreement (BA の別称) is relevant today for its basis of respect, equality and power-sharing. (挿入と強調は筆者)

McDonald が、ここで自分の追求するアイルランドの南北統一について、わざわざ Foster をはじめとする北アイルランドの多数派住民プロテスタントの包摂に配慮したことばを用いている背景には、Foster が、あるドキュメンタリー番組でもらしたユニオニスト長年の怖れがあったとされています。「もし、北アイランドでイギリスへの帰属について問う住民投票 (border poll) が行われ、アイルランドの南北統一という結果になったら、私はもうここに住みつづけられると思わない。たぶんここを去るでしょう。」Foster の弁は、植民地の解放・独立、国境地帯の帰属替えが迫る中、支配の立場にあった者がその地位を追われ、今度は自分たちが二級市民に転落するのではという予期不安の中で口にする、「引揚げ」という選択肢に通じると言えるでしょう。その border poll は、北アイルランドの将来は住民の多数意志を尊重して決めると規定する BA によるもので、2016 年の ‘Brexit’ をめぐる国民投票でイギリスの EU 脱退が決まったのを受け (ただし北アイルランドではカソリック住民を中心に残留を求める票が多数でした)、実施がにわかに取りざたされ始めています。そうした中で、Foster の発言に自らの不安や焦燥感を重ねるプロテスタント住民はと少なくないと思われます。

その風前の灯のような心理状況のプロテスタントに対して、McDonald は、「北アイルランドは、もう緑とオレンジ（カソリック・ナショナルリストとプロテスタント・ユニオニストのシンボル・カラー）の二色に塗り分けられる社会ではありません。私たちは、虹の七色で表される多様なアイデンティティ（diversity of identities）からなる社会に暮らしているのです」とも応えています。ここで彼女の主張が diversity を称揚する言辞となっているのにも時の経過を感じますが、とにかく McDonald は、そうした認識のもとに、統一後のアイルランドの将来像を、単に「南」が「北」を回収するのではなく、「a new and agreed Ireland」と表現したのです。彼女はまた、その a new Ireland を、この間にアイルランドの南北で確実に生じた「変化」の延長線上に位置づけ（つまり夢想ではないとし）、今あらためて異なるアイデンティティ集団の間の対等性、平等、権力分掌を紛争後の社会再建の基本理念とした BA に立ちかえり、共にその「変化」をさらに進めようとする主張なのです。彼女は change ということばで、「変化」について語っていますが、それがむしろ「変革」transformation の結果であるのは明らかでしょう。

では McDonald はどのような「変化」に注目しているのでしょうか。彼女はまず、1922 年のアイルランド南北分割によって生まれた二つの保守的な政体が、双方とも不平等と不寛容に満ちていたとし、「北」については、そこがカソリックを冷遇する家（cold house）だったとして

います。しかし、プロテスタントがカソリックを制度的に抑圧し差別できた時代は、終わったと見ています。ユニオニストは、もはや多数にモノを言わせた拒否権を行使できなくなった、というのがその根拠です。同様に「南」についても、自治を獲得したアイルランドが、プロテスタントの怖れたとおり、イギリス支配に替わってカソリック教会が支配する国（Home Rule became Rome Rule）になり、プロテスタントだけでなく、女性や子ども、そして不可視化された LGBT コミュニティにとっての cold house になったと認めています。しかしそのアイルランドでも、この記事の翌月の 5 月 26 日に、妊娠中絶の合法化をめぐる国民投票が実施され、66.4%（女性に限れば 72.1 %です！）もの人々が Yes 票を投じる結果となりました。これは、記事で McDonald が指摘する、過去 20 年間に実現した「南」の社会としての前進を象徴し、現在の到達点を示す出来事と言えるでしょう。そして彼女は、そうした目覚ましい変革が、頑なに冷徹な国に粘り強く挑戦しつづけてきた「南」の市井の人々の数世代にわたる闘いによってもたらされた、と記すのを忘れません。それは、市民の声が彼女の率いる Sinn Féin の変化も促し、同党は、それまでの妊娠中絶についての姿勢をようやく転換し、5 月の国民投票でも中絶合法化（正確には、合法化に関わる憲法修正条項 8 条の撤廃）支持の立場に立てたからです。勿論 McDonald 自身も、女性たちが SNS を駆使して展開した中絶合法化 Yes キャンペーンに、熱い声援を送りつづけました。

*** conflict transformation における女性の権利 ***

「南」における中絶合法化を、ある Twitter の投稿子のように「これで、ローマ教会に支配された統一後のアイルランドに、ユニオニストは決して立ち入らないという神話は完全に潰えた」（WeeMan@AntrimLens, 2018/05/26）と解する人々がいてもおかしくありません。それどころか、これまで保守主義の度を競ってきた南北の立場は逆転し、かつて「北」が見下した「教会や家父長の権威に盲従する遅れた国」は、今

や「北」を追い越し、さらに前に進もうとしている訳です。少なくとも「北」のフェミニストたちは、自分たちも「南」の女性たちにつづこうと、イギリス本土ですでに認められている中絶の権利の「北」への「延伸」を求め、#thenorthisnext、#nowomenleftbehind などと銘打ったキャンペーンを継続しています。

しかし、先の投稿子が、「（神話の潰えた）今こそみんなが求める、そして我々にふさわしい

the new Ireland についての話を始めよう」と語るように、new Ireland の具体的なあり様についての議論はまだこれからです。国家間関係しか頭がない政治家が国際関係を論じ紛争解決 conflict resolution を目指す時、彼らは何にもまして領土の回収／併合／統一にこだわり、人々の関心をそこに誘導します。しかし、領土問題に国境線の引き直しで決着をつけたとしても、それはまさに領土的解決にすぎません。その時点から、過去を克服し、改まった領土にどのような国や地域を起ち上げてゆくのかという課題への取組が必要となります。長い困難な道のりの始まりです。そこで手つかずになりがちなのが、これから新たな国境と政治的枠組みの下で暮らしてゆく人々のアイデンティティの保全あるいは再構築、そして主流派とは異なるアイデンティティを擁する人々との共生に関わる問題群です。なぜならこれらの問題には、従来の法・政治制度改革や経済へのテコ入れを中心とした平和構築 peace building の発想では歯が立たないからです。その意味で、北アイルランド紛争に終止符をうった BA に、人権委員会の創設が規定され、人権章典の起草が委ねられたのは画期的でした。そして、その草案に、主要なアイデンティティ集団相互の対等性をセイフガードすべく、集団の言語や文化への権利が盛り込まれる運びとなった時、誰もがそれを歓迎しました。それを個人の選択権を脅かす、あるいは社会の共有ならぬ分有への道を開く、と警戒した人達以外は。この「集団の権利」の擁護をめぐる論争の中で埋もれてしまったかに見えるのが、そこにあわせて書き込まれようとした女性の権利でした。しかし、もともとこの権利については、分断社会を修復し平和な社会を築くのに、なぜ女性の権利が必要なのかと訝しがる人が、分断のどちらのサイドにも少なくありませんでした。

近年では戦争／紛争を社会学の視点でとらえる学問領域が拓かれつつあるとききます。そこで紛争の原因やその再生産の構造を、紛争下の社会のあり方との関係で捉え、紛争を乗り越えようともがく当事者の心情や動きに関心を寄せるなら、そうした男女自身による自己省察の営み

への目配りが欠かせません。彼らがそして私たちが、自分たちの社会の過去に向き合い、そこに紛争の根を探り、そこから自分たちの現状や社会の構造を捉え直すことなしに、当事者はもとより研究者も、紛争の再燃を防ぎ、共に生きる社会のヴィジョンを描けないからです。これが真の平和創出に、conflict resolution を超えた、「社会変革をつうじて紛争や分断社会を克服するという発想」 conflict transformation が求められる理由でもあります。そしてとにかく、敵対してきた他者だけに要求されがちな変革が、自己変革を含まなければ、自他の二項対立は乗り越えられません。またその自己変革に日々のジェンダー関係の見直しが含まれるのは自明です。しかし、この点に疑念を抱くというより、思い至らない人たちが多いというのは、それ自体に政治社会学的な分析が必要ですが、ここではそうした人々に向けた説明を今少し重ねておきましょう。

たとえば、Cynthia Cockburn は、紛争地でのフィールド・ワークを重ねた末に、「ジェンダー関係は戦争を駆動するモーターの一つ」と看破しています。つまり紛争下では、対立する集団の双方に、女性を紛争に動員する体制が見られ、それが紛争の再生産や継続に深く関わってきたという訳です。北アイルランドもまた然りで、上述の中絶の権利を中核とする女性の性と生殖に関する自己決定権の否定が、女性に対する暴力や実質的な政治参加の抑制とあいまって、女性を家やコミュニティに囲い込み、そこでしかるべき役割を果たせろというレジームを築き、また堅固にしてきました。Cockburn は、このジェンダー・レジームについて、そうした体制があるからこそ ‘ethnic wars are gender wars.’ なのだと記しています。

私の関心もこのレジームにあるのですが、特に問題視してきたのは、そこで用いられてきた暴力です。それは、紛争下の女性に対する暴力と言え、**「戦時性暴力」**=敵対する他者が**「外」**から行使する暴力に注目が集まる中で、見過ごされてきた暴力です。私はこの暴力を、いわゆる**「戦時性暴力」**とは別に**「内なる暴力」**としてマークし正視すべきと考えています。家父長

／コミュニティ／国家が、我々のモノとして領有した感覚でいる「女」のセクシャリティを管理し、ジェンダー役割を逸脱したり自他の境界を超えたと見た「女」に加えてきた「懲罰」という名の暴力こそが、女性を怯えと沈黙に追い込み、紛争遂行に関わるジェンダー・レジームを維持してきたからです。ですから、そうしたレジームの変革には、その発端で、女性たちが共通の体験としてこの「内なる暴力」について語り、傾聴し合うことが欠かせません。そして、「女なんだから仕方がない」、「どの家でもよくあることだから」として耐え、容認し、温存してきた暴力を、紛争遂行体制との関係におい

て捉え直す必要があります。このきわめて困難な発想上の挑戦を経て、女性たちは、自分たちから声と力を奪ってきた「囲い」に見切りをつけ、どのような社会になれば本物の安全を手に入れ平和に暮らせるのかを想い描けるようになるはずです。そしてそのイメージを他者と共有できた時、彼女たちは分断を超えるための第一歩を踏み出していると言えるでしょう。この真に安全な社会の再想像 *reimagining* の途上で、女性一人一人をアイデンティティ・ポリティクスの檻から解放し、その後も支えつづける上で大切な鍵となるのが、女性の権利の拡張と擁護だと私は見ています。

女性たちの物語を待ちながら

ここで重要なのは、暴力で塗り固められたジェンダー・レジームに身を置く女性が、その「不安全」をどこまで語れるか、という点でしょう。仮に女性たちが「お前を守ってやる」と称する者への従属や依存の代償に気づき、「囲いに安全を託す」のが、いかに危ういかを身に沁みて知っていたとしても、抵抗する者に降りかかる懲罰という名の暴力は、悪くすれば死を意味します。自分の庇護者としてふるまう父、夫、パートナーやコミュニティの支配者からの暴力に脅かされながらも、そうした関係や場所にしか生きられないならば、女性たちが、その囚われた状況について語るのをためらい、沈黙を破れずいるのは当然です。ですから、私が、そうした女性たちに対して、いつ沈黙を破り、一身に秘めてきた思いを語り、各々の「内なる暴力」の経験を対立や分断を超えて共有し合えるようになるのか、と待機の構えできたのは、期待過剰だったかもしれません。

それでも時折、遥か遠くから、国境やことばの壁を超えてきこえてくる女性たちの発話、証言、物語がありました。それらに耳を澄ましていると、誰に聞いてもらえるあてもなく発せられたモノログでも、口にせずにはいられなかったことばは、その切実さを翼として時空を超え、届くべきところに届く、と確信させられました。そして私は、そのような物語が自分のもとに届

いた奇跡に感じ入りながら、別の場所にもそのような物語を待っている人がいるはずだと思いました。研究者らしい物言いに戻れば、私が 2001 年のベルファストでの学外研究以来、紛争を生き延びた女性たちの物語を、演劇作品を中心に探索収集してきたのは、そうした物語や語りを傾聴し合う姿勢を、紛争後の社会再建に変革の意志をもって臨む女性が存在する証と捉えていたからでした。そして、そこに示されているはずの変革のヴィジョンや、彼女たちが創り出そうとする New Ireland の真価を見定めようとしていたのだと思います。しかし、女性に対する「内なる暴力」について正面から語る女性ばかりは、なかなか現れませんでした。

私に待望の物語をもたらしてくれたのは、2011 年 3 月、オランダのロッテルダムで開かれてきた国際コミュニティ・アート・フェスティバル ICAF でした。ICAF2011 には、北アイルランドのデリーから、証言演劇プロジェクトの Theatre of Witness も招かれていて、その紹介を兼ねたセッションに引き寄せられた私は、彼らの近作に、女性たちの経験をもとにした作品もあると知ったのです。I Once Knew a Girl と題されたその作品は、アメリカからデリーの Playhouse に招請された Theatre of Witness の主宰者 Teya Sepinuck が、地元の女性五人と制作したもので、彼女たち自身が体験した「内なる

暴力」、すなわち近親者や武装組織の上官から受けた性暴力を、演者として証言する内容でした。演者には、コミュニティを統制する IRA に目をつけられた夫を、爆弾テロに加担させられた挙句に爆死させられたカソリック女性 Kathleen Gillespie も含まれています。聴衆は彼女がプレイバックする凄惨な体験を、その証言に立ち会う形で受けとめ、「内なる暴力」の本質が、女性に限らずコミュニティに暮らす老若男女すべてを恐怖で縛るところにあるとあらためて知らされます。オランダから戻ってすぐ、この作品について調べると、ネット上に公演案内のポスターが見つかりました。そこには演者の一人の Therese McCann のことばとして、‘It’s was a Republican safe house – but it wasn’t safe for us.’ と記されていました。‘it wasn’t safe for us’ 一私にはそれが何を意味するか即座に分かりました。そこまでくるのに 10 年の歳月が流れていました。

苦節 10 年と言いますが、私の場合、この待ち時間は、先述したような紛争と平和創出に関する新たなパースペクティブを切り拓く修練の時間でもありました。それは＜conflict transformation という課題＞に取り組む＜女性という変革主体＞、そして彼女たちが選んだ

＜アート表現ないし演劇という手法＞という三つの研究領域が重なったところにある自分の研究の核心から目を離さないようにしながら、三者の内の二者の接点にも目を向け、そこで、どのような研究が生み出されてきたのか、それ以前に、この地球上で人々が繰り広げ、積み重ねてきた様々な実践を求め手探りで進む日々でした。この探求をつうじて、socially engaged theatre と呼ばれる社会派演劇の小宇宙に行き着き、シンガポール、旧ユーゴ、イスラエル／パレスチナなどで制作されてきたコミュニティ・ドラマに出会えたのは大きな収穫でした。その反面、研究関心も調査フィールドもオーバーストレッチ気味となり、そこから得た散漫な資料をどうまとめたものか、またそんな資料をまとめる意義があるのか、という心もとなさといつも隣り合わせでした。資料の海に漂流し溺れかけている私を励まし、進むべき方向を照らし出してくれたのも、北アイルランドの女性たちが自分のことばで語ったリアリティ溢れる物語でした。そうした物語を、彼女たちの息吹に接するような気持ちで読んでみると、遠くのフィールドは遠くでなくなり、瞬時にトリップできる場所になりました。

*** Marie Jones、越境とアイデンティティ再構築の旅路***

中でも Marie Jones の物語は、私が 2001 年の学外研究中に探り当てた数少ないプロテスタント女性の声でした。そしてこの春、ベルファストでたまたま遭遇した McDonald の New Ireland 論と、Jones が、まだ紛争のただ中だった 1980 年代から模索してきた New Ireland 像とのシンクに気づいた時、私はそこに、演劇をはじめとしたアートが政治と響き合う北アイルランドならではのシンクロニシティを見る思いでした。同時に、なぜ自分が Jones の描くドラマに度々立ち帰ってきたのかが分かりました。私は、彼女の生み出す物語や人物に、創造的な社会変革 creative transformation の「あり得べき絵姿」を見ていたのです。

1951 年、ベルファストのプロテスタント・

コミュニティに生まれた Jones は、女優としてのキャリアを振り出しに、数人の女優仲間と劇団 Charabanc を立上げて以来（1983 年結成、1995 年解散）、紛争に刻印された分断社会の日常を、自分と同じ労働者階級ないし庶民の目であらえた作品を書いてきました。今ではアイルランドを代表する劇作家の一人で、2011 年に新装オープンしたベルファストのリリック劇場にも肖像が掲げられています。しかし彼女の「今」を形づくっているのは、越境と自己省察に特色づけられたその遍歴と言えるでしょう。私はそこに演劇人としての振幅というより、植民地主義からの脱却をめぐる抗争の中で、かつての支配者側に生まれた人間の良心の彷徨を見てきました。ですから私は、Jones の旅路を辿

りながら、先の大戦末期に、日本の「外地」から「内地」に引き揚げた人々を思わずにいられませんでした。彼らの多くが、森崎和江のような例を除き、Jones の周りのプロテスタント同様、支配者として過ごし、その地位を追われた過去について今も沈黙し、忘却や否認に傾きがちだからです。

Jones の遍歴は、まず彼女が事実上の主筆を務めた Charabanc を離れ、カソリック・リパブリカンの本拠地のあるベルファスト西地区に越境し、そこで新たな盟友と劇団 Dubbeljoint を創設（1991年）した時に始まります。クロス・コミュニティな性格を身上とした Charabanc で、カソリック・プロテスタント双方の労働者階級にアピールする作品を制作し、いずれの宗派のコミュニティ・センターへも巡演していた頃からすると、彼女の越境は、カソリック・ナショナリスト側のサイドを選ぶ行為、悪くすれば裏切りや転向と受けとめられたはずですが、しかし、この越境は、Dubbeljoint で演出家を務めた Pam Brighton との共同著作権をめぐる訴訟（2001 年提訴、2004 年 Jones 側の勝訴判決）で終わりを迎えます。この 10 年の越境を挟んだ前後 35 年の間に Jones が手がけた作品で、私を魅了するのは、作中に彼女の模索する new Ireland 像が垣間見え、その微妙な変化に彼女の遍歴が投影された作品です。

Charabanc 時代の Now You're Talkin'（1985 年初演、以下 Talking）、Dubbeljoint のために制作した A Night in November（1994 年初演、以下 A Night）、ベルファスト東西のコミュニティ・シアターと共同制作したクロス・コミュニティ・ドラマ Wedding Community Play（1999 年初演、以下 Wedding）などがそれにあたります。限られた紙幅では、これらの作品のあらすじすら紹介できませんが、そのいずれでも Jones は、紛争下に暮らす主人公たちに、自らの二項対立への囚われを問わせ、アイデンティティの再構築をとまなう対話や旅をさせています。それはたとえば、和解のための合宿に参加した女性 5 人が膝詰めで語り合う Talking では、プロテスタント穏健派の Jackie が、カソリック強硬派の Veronica とのダイアログの中で吐露する真

情、“I'm Irish too, but I'm not allowed to be!” となっています。Jones の分身のように見えたその Jackie は、Talking から約 10 年後に書かれた A Night で、下級公務員の主人公 Kenneth となって「甦り」、Jones に代わって自らのアイデンティティを問うプロテスタント中流階級を演じます。彼は、カソリックの同僚との交友をつうじ、アイルランドのサーカー・チームのサポーターとなり、ニューヨークでワールド・カップを観戦する旅を執行します。そして最後に、“I am a Protestant Man, I am an Irish Man.” と宣言するのです。



Jones は、このような形でアイデンティティ・ポリティクスに挑戦する人々に期待し、彼女のめざす New Ireland を託そうとしているのではないのでしょうか。私には、彼女の主人公たちが、足元に引かれた自他の境界を超える中で、文字どおりの国境を超えずとも、彼らなりのトランスナショナリズムを実践しているように見えます。しかし、彼らがそれまで不問に付してきた自分のアイデンティティや支配者としての地位を問う越境者 transgressor なら、彼らは、手にした場所から一歩も退かず、彼らを逸脱者と見て迫害する多くの現状肯定派を向うに回す結果になります。Jones 作品は、そうした「よくある」プロテスタント多数派の造形においても秀逸で、自らを笑うセンスにも溢れています。たとえば、先述の Jackie とは対照的に、頑迷なプロテスタントに設定された Thelma や A Night の Kenneth が顔色をうかがう妻 Debrah がその典型です。Debrah は、テレビで政治ニュースが始まると決まって掃除機のスイッチを入れるんだ、と Kenneth は明かしますが、聴衆は、

そんな Debrah に自分自身や身近な人物を見るはずです。

BA 締結の翌年、ベルファスト・フェスティバルのハイライトとして上演された Wedding は、宗派を超えた結婚というタブーを扱った、ベルファスト初の本格的なクロス・コミュニティ・ドラマでした。このドラマの制作に、プロテスタント側の脚本の取りまとめ役として参加した Jones は、そこに、式の朝、花嫁の家で台所仕事を手伝う近所の女性のダイアログを盛り込んでいます。このシーンに登場するのが、40 年前に吹き込まれたカソリックに対する偏見を未だに信じていると揶揄される Sylvia です。彼女は、流しで洗い物をしながら、見るからに優勢なカソリックの文化に自分たちの文化が飲み込まれてしまわないか、という不安を漏らします。開明派の Tilly は、彼女を“wake up”と諭し、宥めようとしますが、Sylvia は納得せず、いつもは棚上げにしているプロテスタントとしての底知れない恐怖の一端を口にします。“They want to take what we have from us.” それに対して Tilly が “Like what...take what away.” と聞き返すと Sylvia は、“Being British.” とだけ答えます。(強調は筆者)

*** 女性たちのトランスナショナリズムは今 ***

Kenneth が身内や仲間から招いた心理的迫害は、Jones にも降りかかり、彼女は、この作品によって、‘Fenian-Loving Protestant hater’ (fenian はカソリックの蔑称) と勝られるようになります。現状維持に躍起の多数派の不安／恐怖が、その裏返し、過剰防衛や越境者への脅しとなる時、私はそこにもまた「内なる暴力」を見ずにいられません。そして Jones も、この種の「内なる暴力」が、境界を超えようとする女性を脅かしてきた事実を見逃さず、早くからそれを自作に描き込んでいます。強い憤りが込められた描写からは、他所で「自分は自分に正直に書くまで」と語った彼女の、作家としての矜持や「内なる暴力」に屈しない姿勢が読み取れます。

その描写とは、和解のためのワークショップで精神論を振りかざすアメリカ人ファシリテーター

二人のやり取りを通じて、Jones が照らし出す「普通の」プロテスタントの不安や恐怖は、彼らのアイデンティティや文化の行末に関わる比較的穏便なものにとどめられた観があります。それはこのドラマの制作過程でプロテスタント女性たちが示した「自分たちの表象のあり方」に対する懸念に配慮したためかもしれません。しかし本シーンの描写がどう決着しようと、Jones が、彼らが何を奪われるのを一番恐れているかを知らないはずはありません。それは、先の Foster の予期不安に通じる北アイルランドの多数派の「支配者ゆえの不安」であり、普段は心底に積み込まれていても、下手に触れようものなら、ねじ伏せられた凶暴な犬のように飛びかかって咬みつきかねない性質のものです。Jones は A Night の Kenneth に、その不安や恐怖を抉りださせ、家に招いた友人や妻に突きつけさせます。その途端、凍り付いたようになる周り。沈黙を破った友人の一人が彼に浴びせた非難 “You are British and you should be ashamed of yourself.” は、これもまた多数派が常に抱えてきたもう一つの恐れ、すなわち仲間からの拒絶や追放の始まりでした。

ターを追放した女性たちが、各々の本音を語りあう Talking の一場面で、実は何にも合意できず違いを確認するので精一杯の女性たちを、「女どもが合宿所を占拠し、カソリックと何やら画策している」と見た狂信的なプロテスタント団体が、レンガを投げ込むシーンです。レンガには「女としての本分を忘れ勝手に振る舞うとは何事か」という趣旨の脅迫状が結び付けられていて、その末尾に「北アイルランドのプロテスタントになり代わって」とあるのを見た Jackie の怒りは頂点に達します。彼女は、「奴らが私の宗派の名を語ってこんなことをするのは許さない…私は議会だって、(カソリック少数派との) 権力分掌だって望んでいたのに、誰も耳を貸さなかった…ここは、彼らの国でもあるんだし、私たちは一緒に暮らせる、そう一緒にやっ

てゆける…もし連中が、(公民権運動の始まった) 69 年にカソリックの言い分をちゃんと聞いていたら、この国は安泰だったはずなのに。」と、半ば支離滅裂にまくしたてます。(挿入は筆者)

周りの女性たちは、Jackie の剣幕に気圧され、彼女に落ち着いてと言うばかりで、誰も共感を示しません。越境者に向けられた暴力を告発する Jackie が孤立無援であるばかりか、無視され嘲りの対象として描かれるこのシーンは、1980 年代半ばの現実を映してきわめて痛切です。そして私たちは、足元でのトランスナショナリズムの実践を阻害する力が、女性同士の間でも、このように隠微な形で行使されていたと知らされます。ここで思い起こすのは、当時から今に至るまで、同様に孤立無援で国境を超えてきた女性たちの姿です。アイルランドの南北双方で非合法とされてきた中絶を、イギリス本土のクリニックで受けるために孤独で不安な旅に出ざるを得なかった女性たちも、彼女たちを囲い込んだ国家が法によってその身体とセクシャリティを管理する領域を脱するという意味で越境者でした。勿論、その越境は、密かに何事もなかったかのように行われるのが常でした。

それが大きく変化したと悟らされたのは、今年の 5 月、「南」で行われた妊娠中絶の合法化をめぐる国民投票で、自分も Yes 票を投じるのだと、世界各地からアイルランドに帰国する女性たちの写真や映像を目にした時です。

#hometovote の呼びかけに応じ、空港の出国ロビーに並ぶ女性たちは、自分の意志を明示したステッカーやプラカードを手にとり彼女たちを待ち受けた人々とともに、大手をふってトランスナショナリズムを実践する越境者に映りました。そのトランスナショナリズムは、文字どおり国境を超えて自分の意志を表明した女性たちだけのものでなく、国家や集団に保護される見返りに次世代の生育や経済成長への貢献役に繋ぎとめられる存在から脱却したいと願う人々すべての目指すところと言えるでしょう。その彼女ら彼らが国境や国籍の違いを無意味化しつつあるのも確かです。それは、アイルランドの人々が、入院中に中絶手術を拒まれて亡くなったインド人歯科医師 Savita Halappanavar さんに示した深い哀悼と遺憾の気持ちからも明らかでしょう。ダブリンの街角の彼女の顔を大きく描いた壁画は、今回の国民投票に際して、中絶合法化に賛成の人々の聖地になりました。

もう一つのトランスナショナリズムとして見逃せないのが、かつてアイデンティティ・ポリティクスに分かたれていたアイルランド南北の女性たちが、その分断要因ともなってきた妊娠中絶の是非論を克服し、この問題で連携する動きです。「南」で中絶合法化を導きだした女性たちにサポートを求め、「北」でも同じ変革を実現しようとする女性たちのトランスナショナル・フェミニズムが、この先どのようなうねりを生み出してゆくか、大いに気になります。そ



のトランスナショナリズムは、国籍や民族の「境界」を超えてケアしあう女性を脅かしてきた「内なる暴力」を、各々の内輪の問題から共に立ち向かうべき課題に据え直してゆけるでしょうか。私はトランスナショナル・フェミニストが想い描く New Ireland の物語に耳を澄ましながら、そこに込められた社会変革への意思が、各々の「罅」の中に安住する女性や沈黙したままの女性をどれほど惹きつけられるか、見守りつづけたと思います。

掲載写真についての付記（掲載順）

1. Peace & Beyond Conference の一コマ
(筆者撮影)
2. Marie Jones の肖像（筆者撮影）
3. London-Irish abortion rights Campaigners
(Photo: Alastair Moore)

（分田順子・都留文科大学）